

通常の学級における個に応じた教育実践の研究 —特別支援教育の視点をふまえた指導—

発達臨床支援高度化コース

18AD107

堀切 雅子

【指導教員】 長江 清和 葉石 光一 蛭多 令子

【キーワード】 授業のユニバーサルデザイン 特別支援教育 合理的配慮の提供 小学校音楽科の授業づくり

1. 問題の所在

遠藤・佐藤(2012)は、交流及び共同学習において、音楽、体育、行事、給食、清掃などの交流が主であると述べている。それは、教科の特性として、言語理解が授業の参加条件としてなりにくいため交流及び共同学習が行いやすいと捉えられている。

しかしながら音楽の授業は、好き、嫌い、得意、不得意が表れやすい。なぜなら音楽は、体全体を通して理解したりするもので、しかも情緒と密着した関係にある。音楽科の学習は、知覚・感受し、思考力・判断力を働かせ、歌唱や演奏などでは特別な身体技能を使って表現する、といった広い範囲にわたり、きわめて複雑な脳神経ネットワークの働きを投入して行われる学習である。音楽科の指導側からみたまずきとして、歌うことに関しては「調子外れである」「周囲と音量を合わせられない」「歌う意欲が見られず、歌わない」が挙げられ、楽器を使うことに関しては「鍵盤ハーモニカやリコーダーの習得が遅い」ことが挙げられている。他にも聴くことに関しては「音や音楽を集中して聴くことが苦手である」ことがあり、リズムを合わせたり打ったりすることに関しては「簡単なリズムが打てない」「リズムに合わせて動くことが苦手である」「手遊びなどで友達と触れ合うことが苦手である」ことが挙げられている。さらに、読譜に関しては「視唱、視奏が顕著に苦手である」ことが挙げられている。音楽の学習は、学校教育にとどまらず、生涯にわたる活動の一つとして考えられるよう、音楽の指導者側のつまずきを少しでも緩和し、児童の苦手意識が減り、授業に意欲的に取り組むための手立てが必要だと考える。

学習指導要領の改訂を受け、音楽科でも学習内容が増えてきている。学習内容が増えてきているのにも関わらず、時数の確保が難しい現状である。音楽科の授業では、小学校3、4年生が、年間60時間、5、6年生になると年間50時間と週2時間に満たない状況である。このような、少ない時数の中で、学習指導要領の内容をふまえていくためには、全員が「わかる」「できる」ための工夫が必要となってくる。新学習指導要領に挙げられている「音楽の見方、考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けるこ

と」と明記された。音楽に対する感性とは何か、音楽を形づくっている要素とその働きを児童に理解させることは難しい。特に、音楽を形づくっている要素とは、音楽の知識がないと理解ができないと考える。

平成24年12月に文部科学省が発表した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」によると、学習面又は行動面で著しい困難を示す割合は6.5%であった。30人から40人のクラスで、2～3人は学習面又は行動面に著しい困難を示していることがわかる。このことを踏まえ、各学校は、ユニバーサルデザインの視点を活かした授業や合理的配慮の提供を取り入れてきている。

本研究では、音楽の授業において、誰もが「わかる」「できる」を目指し、特別支援教育の視点を生かしながら、授業のユニバーサルデザイン(以下、授業UDと記す)に取り組むことにより、児童がどのように変容していくのかを検証していくこととした。

2. 合理的配慮の提供と授業のユニバーサルデザイン

(1) 合理的配慮の定義

合理的配慮とは、平成19年9月に日本国が署名した「障害者の権利に関する条約」で規定されており、日本が署名した後、その条約の批准に向けて、様々な法律などが整備された。

合理的配慮とは、「障害のある子どもが他の子どもと平等に『教育を受ける権利』を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適当な変更・調整を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて、学校教育を受ける場合に個別に必要とされるもの」であり「学校の設置者及び学校に対して、体制面、財政面において、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」と定義された。

(2) すべての子どもがわかる授業づくり

「特別な支援を要する子どもにわかりやすい授業はすべての子どもにわかりやすい授業である」という考えのもと、「すべての子どもにわかる授業」に関する取り組みが学校単位、各自治体単位、学会単位で進められている。その教育実践を「授業UD」と呼んでいる。「授業UD」とは、「特別な支援が必要な子を含めて、通常学級の全員の子が、楽しく学び合い『わかる・できる』ことを目指す

授業デザイン」であると定義されている。学校で行われる授業の基礎的環境の一つとして、「授業のユニバーサルデザイン」が実施されることは、合理的配慮を提供する上で、非常に重要である。

特別な支援を要する児童を含めた「すべての子どもがわかる授業」を考える際には、三層構造(図1)で考えるとう理解しやすい。

第1層は、集団全体に対してわかりやすい授業を実施する基盤である教室環境や周囲の児童の人的環境を整えるとともに、集団全体に対する配慮である。

第2層は、第1層を基盤にして行う個の特性や学習上の困難の原因に応じた指導・支援を一斉指導中や机間指導中に個別に実施することである。

第3層は、放課後や休み時間に個別に行う指導・支援や通級による指導を活用するなど、個の障害の特性や学習上の困難等に特化した指導・支援を別の場で行うことである。

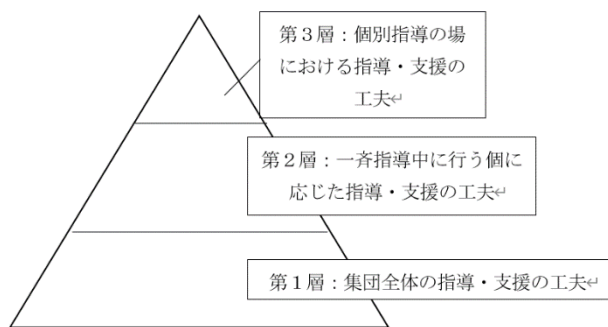


図1 通常の学級に在籍する障害のある児童生徒の指導の階層性(田中, 2017)

音楽の授業において、合理的配慮の第1層は、集団に対してわかりやすい授業を行うために、授業の流れがわかるよう視覚化したり、使用する楽器のみを出しておいたりして、環境を整備することが必要である。音楽室は、刺激の多い部屋でもあるので、落ち着いた環境で授業が受けられるようにすることが配慮として考えられる。

第2層は、第1層で整えた環境で学習する上で、一斉に行う授業が良いのか、グループに分かれて学習するほうが良いのか、またペアなどの学習形態の工夫が必要となってくる。特に、鍵盤ハーモニカやリコーダーの演奏練習に関しては、個別に机間指導をしていくことで、個人の技能の獲得につながっていく。教師からの支援だけでなく、児童同士の学びも必要となってくる。

第3層は、限られた時間の中で学習が進まない場合、休み時間に鍵盤ハーモニカやリコーダーの練習時間を確保するなどである。年間の総時数が60時間、50時間と授業の中だけでは、技能の習得が難しいと考えるからである。この3層の配慮を考えながら、一人一人のニーズに合わせた授業を進めていくことが大切であると考えられる。

(3) 授業のユニバーサルデザイン

阿部(2017)は「より多くの子どもたちにとって、わか

りやすく、学びやすく配慮された教育のデザイン」であると言っている。

教育のUDは「授業のUD化」「教室環境のUD化」「人的環境のUD化」という3つのUDで構成されている。この3つは関連しており、相互に結びついている。

授業のUDとは、より多くの子どもたちにとって、わかりやすく、誰もが参加したくなるような楽しい授業のことである。阿部(2017)は、子どもたちが「わかった・できた」と実感する授業をつくるには、以下の5つの特徴を指摘している。それが、「ひきつける」「方向づける」「むすびつける」「そろえる」「わかったと実感させる」の5点である。

教室環境のUDとは、きまりやルールを「見える化」し、自治的で、子どもたちが安心して過ごせる環境づくりのことである。阿部(2017)は、教室環境のユニバーサルデザイン化のポイントを3点にまとめている。

①ルールのある空間で、皆が快適に生活するための環境を作る。

②暗黙のルールなど、目に見えないものを見えるようにする。

③子どもの「いいところ」が発揮されやすい環境を作る。

人的環境のUDとは、クラスにやわらかい、あたたかい雰囲気を作ることである。そのベースには、秩序のある安心して過ごせる居心地のよいクラス集団がある。児童にとって、教師の言葉も刺激になる。教師は常に「好意に満ちた語りかけ」を心がけることが大切である。

(4) 音楽の授業のユニバーサルデザイン

音楽は、体全体を通して理解する教科である。障害のある児童だけでなく、障害のない児童も学びにくい教科である。音楽の授業をUD化していくことで、どの子どもも学びやすくなり、音楽は楽しい授業であると考えられるようになると思う。

渡部(2015)は「授業のユニバーサルデザインの視点を『焦点化』『視覚化』『共有化』の3つに絞った結果、見通しをもって活動ができるようになった」と述べている。また、「音楽の構成要素を獲得し、リズム遊びや表現活動に積極的に取り入れるようになったことで、子ども達が音楽の時間楽しそうに活動する姿を多く見ることができた」と述べている。また、椿本(2016)は「3つの視点(焦点化・視覚化・共有化)を踏まえた授業構成を行うことで、教材のよさと自らの経験を結びつけることが容易になり、生活経験を活かし、活動を展開していくことができるようになった」と述べている。

以上の点を踏まえながら、授業のUD化の5つのポイント「ひきつける」「方向づける」「むすびつける」「そろえる」「わかったと実感させる」を利用して、授業を行うことで見通しをもって授業に臨むことができ、落ち着いて活動に参加することができると思う。そして、全員の演奏が合わさったことにより、「わかる」「できる」につな

がると考える。

音楽室は、環境整備にも力を入れなくてはならない。普段使っている教室とは異なり、刺激の多い部屋となっているからである。楽器が出してあり、机がなく椅子だけで学習に臨むようになってきている。子どもたちの荷物も散乱しやすい環境でもある。発達障害のある児童だけでなく、落ち着きにくい学習場所である。大変であるが、楽器はその時間に使用するものだけを出しておくことが必要となってくる。また、聴覚過敏な児童も在籍していることもあるので、楽器の演奏の仕方のルールを徹底しておくことで、子どもは落ち着いて音を鳴らすことができるのではないかと考える。

人的環境のUD化では、クラスの雰囲気が温かいものを作り出すことにより、子どもたちは発想豊かに表現することができる。音楽は文字通り、「音」を「楽しむ」と書く。音を楽しむことを授業の中で行うには、豊かな発想、イメージが必要となってくる。教師も人的環境に入るので、教師自身も子どもの発想やイメージを認めてあげることが必要となってくる。

教科活動としての音楽の必要性として、山本(2018)は「①子どもたちに豊かな情操『持続的価値感情』と『音楽の価値観形成』を育てることができる。②子どもたちに音楽の基礎的な能力を身に付けさせることができる。③子どもたちに『音楽に対する鋭い感性(感受力・直観力・判断力)』を呼び覚ますことができる。④子どもたちに生涯にわたって『音楽を愛好する心情』を育むことができる。⑤子どもたちが歌唱・器楽・創作・鑑賞などの幅広い活動を通して、音楽の楽しさ・よさ・喜びを体験し、学校生活や家庭生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てることができる」と述べている。この5点が音楽科でなければ決して育てることができない教育内容となっている。この5点を育てていくためにも、音楽の授業をUD化していき、誰もが「わかる」「できる」授業を目指していくことが必要であると考えられる。

3. 目的と方法

(1) 目的

特別な支援を要する児童に関わらず学びにくい音楽の授業を学びやすくするために個に応じた指導法を実践し、検証していくことを目的とする。

(2) 対象

A小学校 4年生 37名

(3) 方法・分析方法

①方法

授業UDを取り入れることで、学習に困難を示す児童の意欲がどのように変化をしていくかを検証していく。

児童の意欲をあげるための手立てを考え、教材を工夫していく。各クラス児童を数人抽出し、カテゴリ表を基に、指導の効果を検証していく。「表現」「鑑賞」「音楽づくり」の分野でそれぞれどのように意欲の出方が異なるのか検証し、どのような支援が必要かを考えていく。

②観察・記録方法

柳橋・佐藤(2014)の先行研究をもとに、対象授業をビデオ録画し、対象児童の意欲向上及び、低下に関する学習カテゴリと教授行動分析カテゴリを設け、該当する行動全ての有無を記録した。なお、学習カテゴリの定義は表1の通りである。

(表1) 意欲向上と意欲低下に関する学習カテゴリ

カテゴリ	定義
意欲向上	○指示された活動を行う ○歌を歌う ○楽器を演奏する ○音楽を聴く ○板書・拡大楽譜を見ている ○演奏活動に積極的に参加する
意欲低下	●指示に従わない ●姿勢が悪い ●必要なものを見ていない ●課題に取り組まず、他の児童に話しかけている

4. 実践研究 I

(1) アンケート調査から

児童の音楽に対する意識調査を行い、その実態からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践を検討するための基礎資料とした。アンケートの答え方として、児童が答えやすいように10段階で表現した。結果は以下のグラフの通りである。

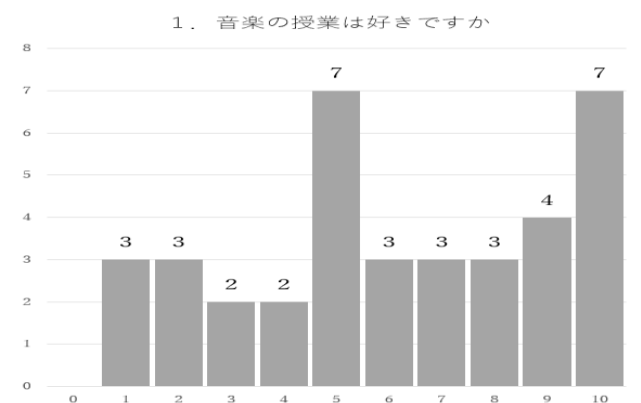


図2 音楽の授業に対する児童の意識

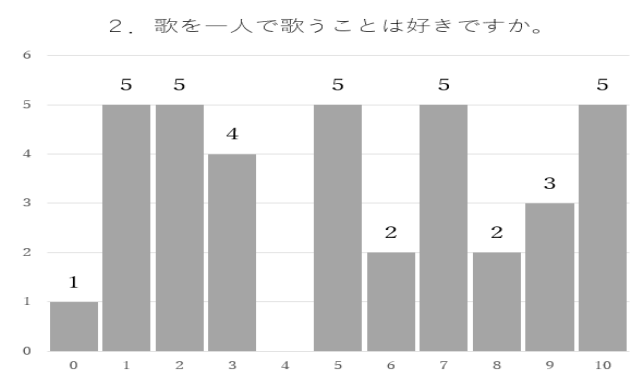


図3 技能面における結果

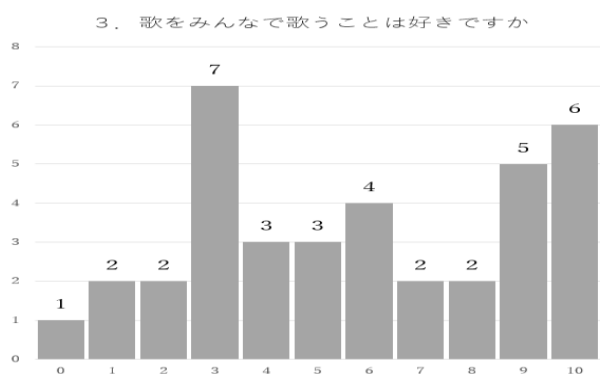


図4 技能面における結果

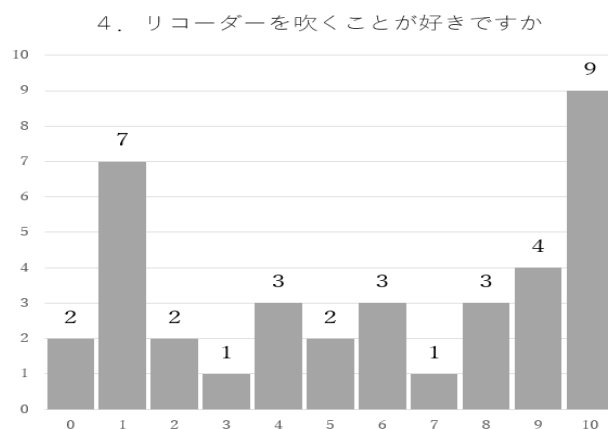


図5 技能面における結果

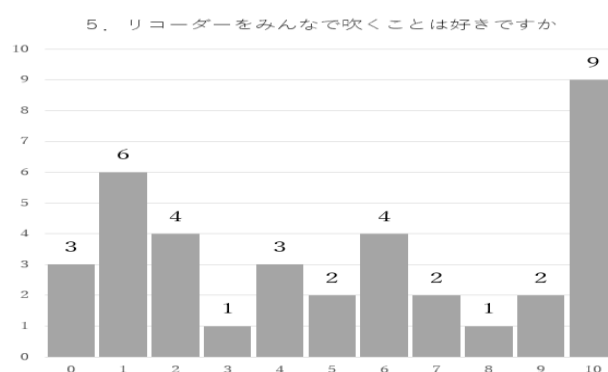


図6 技能面における結果

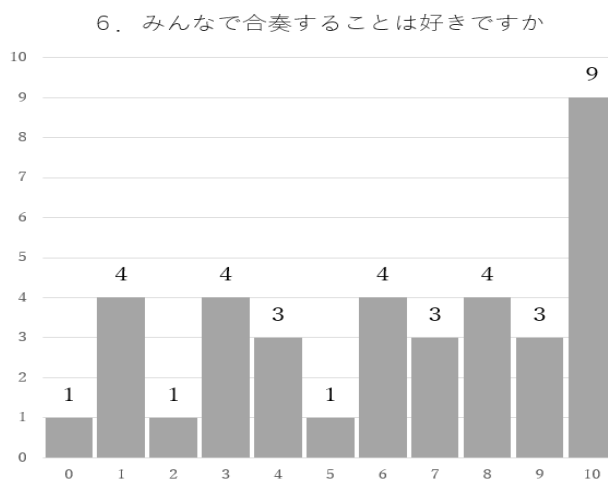


図7 技能面における結果

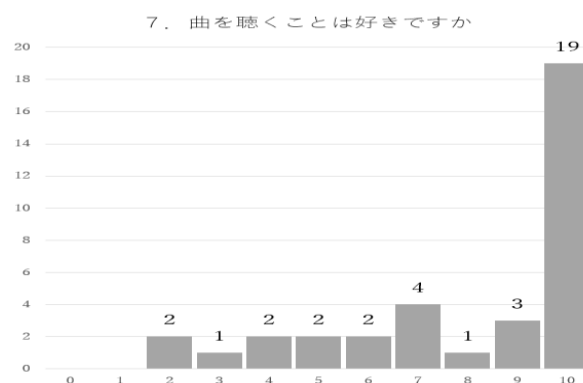


図8 鑑賞に対する意識

(2) 実践分析

アンケートの結果を踏まえ、どの部分で子どもが音楽に対する意欲向上と低下がみられるのか、ビデオに録画し、学習カテゴリーで分析していった。教授行動分析カテゴリーとして、「学習指示」、「教師の行動」、「視覚化」、「表現化」、「鑑賞」、「叱責」、「称賛」、「学習形態」、「環境」の9項目と、31の小カテゴリーを設定した。また、演奏している際の表現と姿勢も両方の活動を行っているときは、両者にチェックを入れていった。さらに、教師が板書しながら、具体的に指示をした場合にも両者にチェックを入れた。10回を超えたものを大きく課題ありと効果があったものと捉え、1～9回は、小さな課題と小さな効果があったと捉えて分析した。その結果を表2にまとめた。

(表2) 効果と課題がみられた教授行動カテゴリー

	効果がみられたもの	課題がみられたもの
大	○歌 (表現)	●演奏姿勢 (環境) ●歌 (表現)
小	○板書 ○技能面の指示 (教師の行動) ○一斉 (学習形態)	●あいまいな言葉 (学習提示) ●叱責

(3) アンケート調査からの考察

図2よりほとんどの児童が、音楽が「好き」と答えているが、中間層の児童もいる。これは、活動だけを見ると楽しいものもあるが、人と合わせたりしながら演奏したり、人前で演奏したりすることによって、苦手意識も芽生えてきているのではないかと考える。また、音程が取れない、楽器(リコーダー)の演奏を難しく感じるなど、技能面に対する苦手意識もあるのではないかと考える。

図3から図7は技能面を中心とした質問項目である。その結果は以下のことが言えるのではないかと考える。歌うことに関しては、合わせて歌うことよりも一人で演奏することの方が好きである。図4から、人と合わせた時に、音程がずれたり、人からずれていることを指摘されたりすることに恥ずかしさが生まれるのではないかと考える。

また、小学3年生から始まったリコーダーの演奏に関しては、新しい楽器の演奏ということで、興味関心をもって演奏に取り組むことができるのだと考える。しかし、運指を覚えられない、タンギングが難しいなど、技能面に課題を抱えることも少なくない。

最後に図7から、合奏することは、ほとんどの児童が「好き」と答えている。音楽会など行事で、演奏することの楽しさを味わってきているからではないかと考える。児童の理由の中に、「音楽は、一人で作るのではなく、みんなで合わせることで、楽しさが倍増するから」「みんなで演奏すると一つになる感じがするから」などが記入されていた。

(4) 実践研究からの考察

(2)の実践分析の4回の記録から、対象児童の行動には、意欲向上・低下の傾向が見られたため、4回の記録を足していった。縦軸は回数を表している。ビデオ観察からデータと行動観察を考察していった。

①集中の仕方

授業の導入には、意欲的に話を聞き、活動に取り組むことができる様子も見られるが、毎回同じことの繰り返しを行っていき、徐々に別の方向を見たり、隣の子に話しかけてしまったりすることが見られるようになってきてしまった。単に同じことを繰り返すことが、良いことではないかと考え、取り組んでいたが、学習意欲の向上につながらない傾向が示された。しかし、ビデオを分析していると、体を動かす活動には、意欲的部分があり、席に座っての活動だけでなく、移動したり、体を動かしたりすることで、意欲向上の場面が増えてきている傾向が見られる。これらの結果から、教材の提示方法や、活動の流れの方法に工夫を加えることで、意欲向上につながるのではないかと考える。

②環境の設定

対象児童が、最も苦手としていることが、ビデオ分析から、姿勢の維持であることが分かってきた。正しい姿勢はどのようなものか、どうしたら声が出しやすいかなどを考えさせるような指示の仕方だけでは、児童は、姿勢を維持することが難しいのではないかと考える。また、周囲の児童も正しい姿勢を維持できていないことも多くあるので、全員で姿勢の確認をするなどしながら、視覚で訴えるような場面の設定も必要になってくる。同じ姿勢を長い時間保たせることは難しいので、①の集中の仕方にもあるように、適宜、体を動かしたり、移動したりしながら、姿勢の維持を図っていくことが、必要になってくるのではないかと考える。

③表現活動の学習形態

全体で表現活動を行ったとき、意欲向上と低下の両方が見られる。これは、周囲の子から受ける影響もあると考えられる。「隣の人に聴かれることが恥ずかしい」や「隣の人と仲良く話したい」などの理由から、意欲低下が見られるのではないかと考えられる。意欲向上の理由として

は、「歌詞、音程を覚えたから」「周囲の人と声を合わせて、歌いたい」などの理由が考えられる。

④教師の指示

技能面の指示に対して意欲低下が見られる。これは、技能面に対して抵抗があるのと同時に、どのようにしたら、音程がとれるか、頭声発声ができるかが想像できないため、意欲の低下がみられるのではないかと考える。この結果から、イメージが湧き、理解ができるような指示を行うことと範唱や範奏を繰り返し聴かせ、指示をしていくことが必要だと考えられる。

(5) ユニバーサルデザインの視点からの考察

①教師の指示

技能面の指示に対して意欲低下がみられたので、わかりやすい言葉や子どもの実態に応じた指示が必要となってくる。抽象的な指示、例えば「お腹の中に風船を入れて大きく膨らませて」という言葉では、子どもの理解が得られないのではないかと考える。言葉だけでなく、体を使って動かしたり、具体物を使ってイメージをとらえやすくしたりして、指示をしていく。また、長い言葉で説明するのではなく、短く、簡単にどの児童にとっても理解しやすい言葉で指示をする。

②導入の工夫

1時間の授業が楽しいと感じ、集中力を維持できるようにするためには、導入の工夫が必要となってくる。児童の集中力を維持できるように、体を動かしたり、止めたり、静と動を入れ込んだ授業展開を取り入れる。特に、導入に常時活動で取り入れていくことで、音楽に親しみを湧かせ、1時間の集中力が保てるのではないかと考える。

③学びの場の工夫

一斉で学習していくことも大切であるが、技能面では、多様な学びの場が必要となってくる。一人で演奏することの難しさや習得の難しさが考えられるので、ペア学習や、グループ学習を取り入れ、お互いに学び合い、主体的に学びに向かう姿勢をつくる授業を展開していくことが必要となってくるのではないかと考える。

5. 実践研究II

(1) 授業の構想

音楽の授業観察から、児童の意欲向上要因及び、意欲低下要因を分析し、授業改善に向けた取り組みについて検証した。

(2) 実践分析

授業の導入の5分間をビデオ録画し、どの場面で意欲が向上し、低下していくのかを検証し、分析した結果を表3にまとめた。

(表3) 効果と課題がみられた教授行動カテゴリー

	効果がみられたもの	課題がみられたもの
大	○具体的指示 (学習提示) ○コミュニケーション(表現)	

	○グループ (学習形態)	
小	○技能面の指示 (教師の行動) ○称賛 ○一斉 (学習形態)	●演奏姿勢 (環境)

(3) アンケート調査から

4月にとったアンケートと同様の内容のものを11月に行い、子どもの意識の変容の調査をした。結果は以下の通りである。

1. 音楽の授業は好きですか

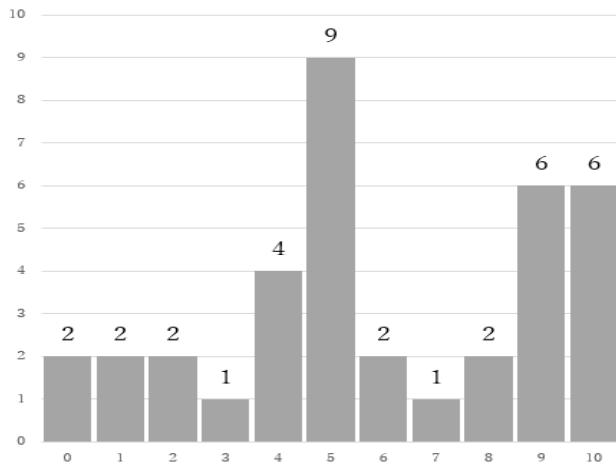


図9 音楽の授業に対する児童の意識

2. 歌を一人で歌うことは好きですか。

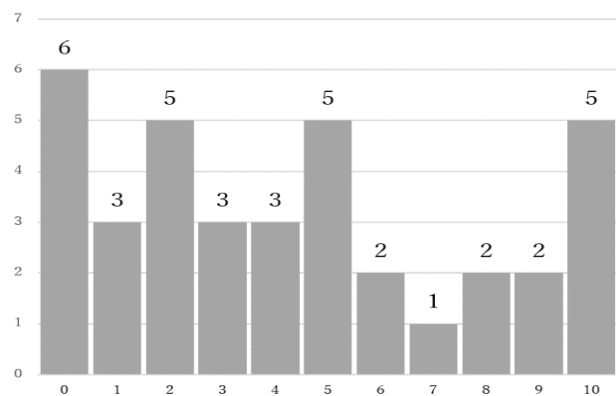


図10 技能面における結果

3. 歌をみんなで歌うことは好きですか

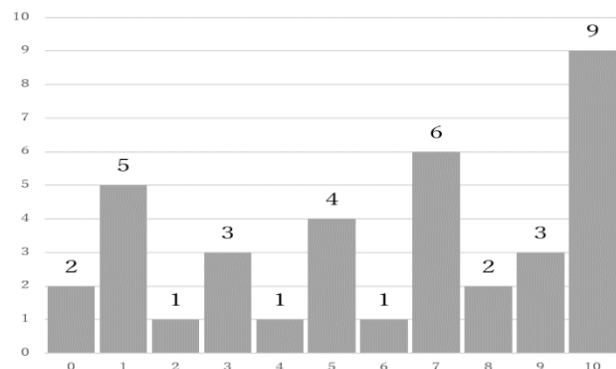


図11 技能面における結果

4. リコーダーを吹くことが好きですか

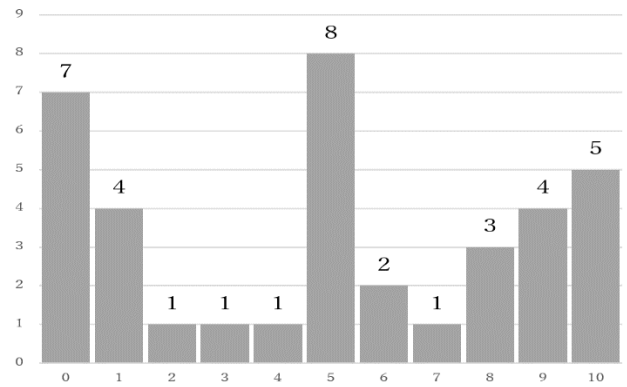


図12 技能面における結果

5. リコーダーをみんなで吹くことは好きですか

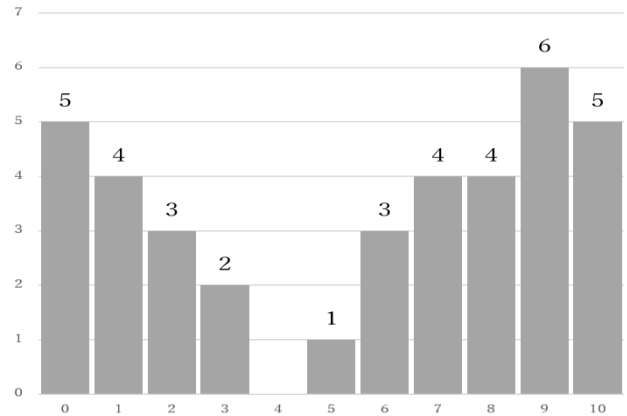


図13 技能面における結果

6. みんなで合奏することは好きですか

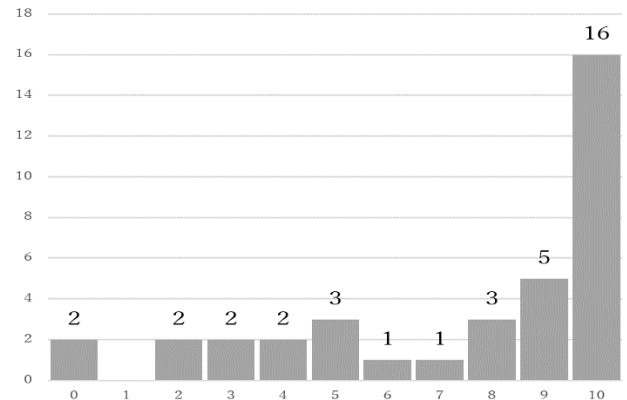


図14 技能面における結果

7. 曲を聴くことは好きですか

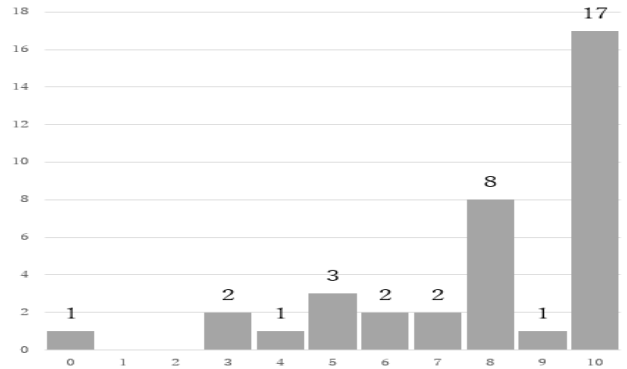


図15 鑑賞に対する意識

(4) アンケート調査からの考察

図9より、音楽の授業に対する意識は4月とほぼ変わらないことが分かった。子どもの回答の中に、「もともと嫌い」「苦手」という意識があり、今回の研究だけでは、意識の変容は見られない。「好き」と答えた児童の中には、「たくさんの楽器に触れるから」や「楽器を使うことが楽しいから」「みんなで歌っているときに楽しいから」などの答えがあった。これは、音楽の授業は、歌を歌う活動だけでなく、たくさんの楽器に触れられる機会があるからだと捉える。楽器に触れる機会を増やすことと、みんなで1つの音楽を作り上げる楽しさを味わわせていくことが必要となってくる。「苦手」と答えた児童は、「リコーダーを吹くのが苦手」や「演奏が難しい」など技能面での苦手意識が強く見られる。楽器の演奏ができたなど成功体験を積んでいくことが必要となってくると考える。これからも、授業改善を続けていくことで、意識を変容させていくことが必要となってくる。

図10～14の技能面に関するアンケートでは、意識が高まりつつあるように見られる。これは、2学期に行った音楽会の練習を経てきたことや授業の中で合奏や合唱をおこなったことにより、技能面に対する意識が高まっていると考えられる。「好き」と答えた児童の中には、「好きな歌を歌うとき」や「一人で歌うのを聴かれないとき」は楽しいと感じている。しかし、一人で歌うことは、プレッシャーを感じたり、他の人に聴かれるのは恥ずかしいと感じたりする気持ちから、苦手という意識もあるようだ。一人で演奏するより、みんなで演奏することのほうが楽しいと感じている意識が高まってきていることが分かってきた。これは、一人で音楽を作るのではなく、みんなで音楽を作り上げる楽しさや音楽会を経験したことを味わってきたからではないかと考える。

(5) 実践研究からの考察

授業実践では、5月～7月でできた反省を生かし、導入を工夫した実践を行った。その結果、教師に対する指示にも意欲的に取り組めるようになってきた。活動は、本時に入る前の常時活動であり、音の速さや、音が鳴っているときに体を動かすようになってきた。しかし、自分の思いが強いときは、音の鳴っていないときにも、体を動かすなど、勝手な行動も見られるが、指示に対する理解が深まり、音楽をよく聴いて活動に取り組めるようになってきている。また、活動も1人で行うものではなく、グループやペアで行うことにより、友達とのコミュニケーションも増え、活動自体に意欲的に取り組めるようになってきている。

(6) ユニバーサルデザインからの考察

環境設定としては、姿勢の維持に課題があった対象児童が、体を動かす活動を取り入れたことにより、姿勢の維持や、集中の仕方にも変化が見られてきた。静と動の活動が功を奏していた。

表現活動の学習形態では、周囲の子から受ける影響を

少なくすることにより、自分の活動に集中できるようになってきた結果が見られる。全体で、体を動かすことにより、音楽に対する抵抗が少なくなってきたものだと考えられる。馴染みの曲が流れることにより、好きな活動だと捉え、楽しく表現活動に取り組めるようになってきた。

6. 総合考察

(1) アンケートからの考察

4月にとったアンケートと11月にとったアンケートを個で追って比較すると、音楽に対する意識は、プラスになっている児童とマイナスになっている児童の数はほぼ変わらない。しかし、プラスの変容が多くみられたアンケート項目があった。それは「みんなで合奏することは好きですか」「みんなで歌うことは好きですか」「みんなでリコーダーを演奏することは好きですか」という項目だった。この項目は、半数の児童がプラスに変容していた。理由としては、一人で演奏するというよりも、みんなで合わせた演奏が楽しいと感じたり、1つの音楽をつくりあげたりすることの良さを感じられるようになってきたのではないかと考えられる。

(2) 実践研究からの考察

5月～7月の研究と11月の研究を比較してみると、前期では、音楽に対する意識が低く、人前での演奏に対する抵抗が見られている。11月の研究では、音楽に対する意識は変わらないが、人前での演奏は、行事もあり意識が少し変化している。これは、人前で演奏することの楽しさを味わったからではないかと考える。また、協力して、1つの曲を作りあげる楽しさも同時に感じられるようになってきたからではないかと考えられる。

(3) ユニバーサルデザインの視点からの考察

ユニバーサルデザインの視点で授業をつくっていた前期では、パターンを決め、同じことの繰り返しを行う授業だと対象児童は飽きてきてしまうことがあった。後期の研究では、導入を工夫したことにより、教師の指示に対する理解が深まっているのではないかと考える。教材の提示方法の工夫や、活動の流れが見えていることにより、意欲が向上できているときもあれば、低下が見られることもある。視覚だけでなく、体を動かす活動を取り入れていくことにより、1時間の集中力が保てるのではないかと考える。しかし、同じことの繰り返しになると、対象児童だけでなく、他の児童も意欲の低下が見られるのではないかと考える。適宜、視覚に訴えた授業を展開していくことも必要となってくるのではないかと考える。

7. まとめ

総合考察で述べたことは、ユニバーサルデザインの視点の効果が表れたと評価できる。そこで、本研究のまとめを阿部(2017)の観点をもとにまとめる。阿部(2017)は「教育のUDは3つの視点がある。」と述べている。1つ目は「授業のUD化」2つ目は「教室環境のUD化」、3つ目は「人的環境のUD化」である。

1つ目の「授業のUD化」を行うことにより、音楽の授

業は学びやすい授業になるのではないかと考える。それは、導入の工夫により、子どもたちが楽しいと感じ、体を動かして活動に臨みたいと考えられるからである。2つ目の「教室環境のUD化」においては、音楽室は通常の教室と異なり、机や椅子が常備されておらず、部屋も広く、視覚的に刺激を受けやすい環境にある。だから、常に学ぶ教室と変わらない環境を作り出すことにより、落ち着いて学習に臨めると考える。部屋の広さや異なる環境を生かした導入をすることで、音楽に入り込みやすくなると考える。3つ目の「人的環境のUD化」では、音楽は一人では作りあげることが難しい教科であり、他者との協力が必要不可欠である。友達と協力したり、グループで活動したりすることを取り入れていくことで、音楽に対する苦手意識が軽減されるものと考えられる。

8. 今後の課題

この研究を経て、音楽の授業改善のポイントを以下の通り4つ提案する。今後、さらに実践研究を深めていく。

①全員参加の導入の工夫

ユニバーサルデザインの視点で、視覚に訴えた導入も必要だが、全員が同じ活動をしていくことで、意欲の向上を図れるのではないかと考えられる。児童がどの活動を行っているのか、分かりやすくする必要もあるが、同じ活動を全員で行うことにより、1つの音楽を作り上げていくという思いが育てられるのではないかと考える。「常時活動」は、本時の活動に必要な音楽的要素を前もって学習する活動である。それを、全員で参加することにより、本時の活動をよりよくできるのではないかと考える。そこで、授業改善のポイントとしては、視覚に訴えた教材提示をすることと、常時活動による音楽の要素を学ぶことにより、より一層、表現活動の幅が広がっていくのではないかと考える。

②多様な情報の取り入れ方

情報の取り入れ方としては、教師の指示を耳から入れる場合と、板書で書かれたものを目から取り入れる場合がある。児童により、情報の取り入れ方は様々になるので、視覚からも耳からも情報を取り入れやすく授業を展開していくことが重要となってくる。教材の提示の仕方にも配慮が必要となってくる。

③技能面の指示を含めた授業の設定の仕方

技能面の指示では、子どもたちにイメージしにくいものが多い。例えば「頭の上から声を出して」という指示だと、子どもは「声は口から出てくるのに、頭の上からはどうやって出すのか分からない」などである。そういった小さな積み重ねから、子どもの音楽に対する意欲の低下が始まるのではないかと考える。そこで、子どもがイメージの付きやすい指示をしていくことが、授業改善のポイントとなるのではないかと考える。抽象的な指示ではなく、具体的な指示によって活動に意欲が出てくるのではないかと考える。

④身体表現を含む多様な表現方法

今回の研究で、体を動かす活動を取り入れたことにより、集中力が持続したという結果が見られた。このことにより、動きのある活動を取り入れたたり、止まる活動を取り入れたたりして、授業の改善を図っていくことが必要となってくる。音楽を聴いて座っているだけでなく、その音に合わせて動きを作ったりする活動も必要となってくる。しかし、時と場合によっては、静の動きも必要となってくる。歌唱の活動で、動いていたなら、歌うことに集中できなくなってしまうのではないかと考える。表現方法を自由にするには必要だが、時と場合によることを念頭に取って授業を行っていく必要があると考える。

9. 参考文献

- ・阿部利彦(2017)「通常学級のユニバーサルデザイン スタートダッシュQ&A 5 5」 東洋館出版社
- ・阿部利彦(2017) 編著「決定版！授業のユニバーサルデザインと合理的配慮 子どもたちが安心して学べる授業づくり・学級づくりのワザ」 金子書房
- ・遠藤恵美子 佐藤慎二(2012)「小学校における交流及び共同学習の現状と課題—A市の通常学級担任と特別支援学級担任への質問紙調査を通して—」 植草学園短期大学研究紀要 第13号 59-64
- ・平野次郎(2017)「資質・能力を育成する 音楽科授業モデル」 学事出版
- ・文部科学省(2012)「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
- ・野村新 下山田裕彦(1989)「教育実践の原理と展開—若い教師のための入門— V章 実践のための音楽教育とは」
- ・阪井恵(2017)「明星大学大学院 教育学研究科 年報 第2号」より「音楽授業のユニバーサルデザインに向けて—音楽科の教師・研究者のための基本的な情報—」
- ・阪井恵 酒井美恵子(2018)「音楽授業のユニバーサルデザイン はじめの一步」 明治図書
- ・田中裕一(2017) 監修「合理的配慮のための授業アイデア集」 東洋館出版社
- ・拓殖雅義(2014) 編著「ユニバーサルデザインの視点を活かした指導と学級づくり」 金子書房
- ・椿本恵子(2015)「音楽科教育におけるユニバーサルデザインの授業づくり」
- ・柳橋知佳子・佐藤慎二(2014)「通常学級における授業ユニバーサルデザインの有用性に関する実証的検討—小学1年生「算数科」を通じた授業改善を通して—」 植草学園短期大学研究紀要 第15号 49-56
- ・山本文茂(2018)「音楽はなぜ学校に必要か その人間的・教育的価値を考える」
- ・渡部尚子(2016)「音楽教育授業において学習意欲をもつための小学1年生の授業づくり—誰もが『音楽っておもしろい』と思える授業のユニバーサルデザイン化—」